

教員氏名：堤 大輔（現代コミュニケーション学科／教授）

1. 教育の責任

育英短期大学着任以前は、他大学において「教育原理」「道德教育」など、教職課程の授業を主に担当していた。

育英短期大学では、当初は保育学科に所属し、保育士資格と両学科の教職課程に関する授業を主として担当していた。また、幼稚園教諭を目指す学生を対象に、中等教育レベルの基礎学力のリメディアル教育となる授業を担当していた。

現代コミュニケーション学科に移ってから教職科目を継続して担当してきたが、現在は4年制大学編入等の進学を目指す学生の指導と、論理的コミュニケーションや、カウンセリングマインドをもったコミュニケーションなど、コミュニケーションの基礎に関する授業を担当している。またこの7～8年間、学科の1年生全員に時事問題に関する課題を出題する担当者を務めている。ゼミについては毎年、1年生、2年生それぞれのゼミの担任をしている。併設の育英大学では、兼担として、「保育原理」の授業を担当している。

現在の主な担当科目一覧		
育英短期大学	両学科共通基礎科目	現代の教育
	現代コミュニケーション学科	コミュニケーション コミュニケーション演習 アカデミックライティング 小論文特講 キャリアプランニング 卒業研究
育英大学	教育学部教育学科	保育原理

2. 教育の理念

教育の理念、すなわち、教育とはそもそもどういうものであるべきか、ということを、現在の私がおかれた上記の立場に即して言うとするれば、次のようになる；

- 1) 学生各自が、就職や進学等、具体的な目標をもっている場合は、その実現に資する教育を行うべきである。目標が定まらない学生には、これまでの自身を振り返り、同時に社会を見渡して、目標を見出せるよう、手助けすべきである。さらに、そうして見出した目標を、場合によっては本人が自身にとってより良い方向に思い直していけるよう、様々な知識や考え方を提示していくべきである。そのさいの重要な判断基準の

一つは、本人の人生が、本人にとって納得のいくもの、あるいは自身と大事な他者の身を守ることができて、広い意味での幸せなものになるように、ということである。

- 2) 個々人の問題だけでなく、集合的な問題もある。すなわち、世の中を、住みやすい場所に保つこと、あるいは、より住みやすい場所に変えることに資する教育を行うべきである。そのさい、誰かにとっての住みやすさが、別の誰かにとっての住みにくさになるようでは旨くないので、都度都度の最適解を求めて他者と対話をするメンタリティやスキルの教育が重要である。

3. 教育の方法

レジュメとそれに関する説明に加えて、次のパターンを用いることが多い。

- ①各授業で取り扱うべき内容に関する、学生の興味を喚起しやすい読み物や映像を提示する。読み物としては、自分が論文として書いた文章を平易にアレンジしたものや、教科書的出版物の分担執筆者として書いた文章を用いることもある。
- ②それに関してディスカッションを行ったり、学生全員のコメントを聞いたりする。あるいはコメントを書かいてもらう。
- ③それに対して私から適宜補足したり、理解を深めるための追加的な問いかけを行う。
- ④学生が互いの考えによって影響を与え合い、刺激を受け合えるようにする方法として、授業中に学生から google form に投稿されたコメント群を即座にスクリーンに映したり、あるいは授業後に、全学生または全グループの考えを集約したエクセルファイルを google classroom にアップロードしたり、プリントにして次の回の授業で配布したりする。そのさい私からのさらなる補足もする。

4. 教育の成果

説明した内容を十分に理解し、演習や期末試験における客観問題にほぼ全て正解する学生もいる一方で、ごく平易な問題にしか正答できない学生もいる。論述式の演習課題や期末試験問題に対しても、意欲的に、創意工夫を凝らして取り組んでくる学生がいる一方で、非常にあっさりと書いてくる学生もいる。記述量が少な目で、内容も優等生的ではないものの、本質的で鋭い、といったタイプの学生も、それはそれで認めるべきだが、ただし近年少なくなっているように感じられる。

5. 教育における今後の目標

上記の「ごく平易な問題にしか正答できない学生」にも授業内容をよりよく理解してもらうために、教材の選定や作成、説明や演習の方法に関して、常に改善を続ける必要がある。

また、理解度の高い学生に対しては、卒業後も自ら学び続けるよう、問題意識や知的探求心を喚起できるような授業を実現する必要がある。

なお、上記両タイプの学生が混在している授業において、上記2つの必要性をともに満たす授業を行うことは可能である。混在しているからこそ、どちらのタイプからも、上の「4」に言う「本質的で鋭い」考えにたどり着きやすい、という場合もある。そういった工夫を続けることも必要である。

以上述べてきたことを実現するために私としては、一方では学术界や一般社会に対してアンテナを高く保ち、他方では学生との対話を積み重ねるべきであり、それが今後も教育上の目標となる。

【添付資料】

- 1 担当科目のシラバス
- 2 授業で使用しているプリント教材のサンプル
- 3 上記「3 教育の方法」の①で言及した、自作の文章
- 3 上記「3 教育の方法」の④で言及した、学生のコメントを集約したエクセルファイルや、グループディスカッションの各グループの記録をまとめたプリント

(2026年6月30日現在)